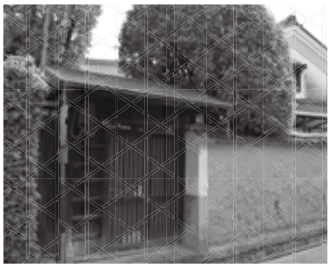
vol.286

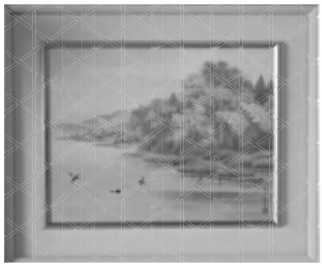
# 画家・西岡都久路の風景

西田 孝司（松原市文化財保護審議会）



▲今も残る都久路旧宅の門と土塀（上田7丁目）　江戸時代末期につくられた遺構を受け継いでいる。

▲「ぼたんの図」（昭和60年）50号。西田家の庭のぼたんを描いた。つい立仕立て。



▲「大塚山」（昭和55年）10号。都久路は同絵をもとに、類似風景画を数点、描いている。

▲西岡都久路（1900～1987）昭和60年前後。（右から3点とも上田7丁目・西田敏弘氏蔵）

**昭和初期以降、松原・上田に居住南画の世界。写実の大塚山古墳**

ここに、「大塚山」と題された日本画があります。画家の西岡都久路が、宮内庁が管理する六世紀半ば～後半に築造された、わが国五番目の巨大前方後円墳を描いたものです。絵右下に「庚申秋日写　都久路生」とあり、昭和五十五年の作品です。

西大塚一丁目の前方部の西側から眺めた構図で、樹木に覆われ、北西の濠で泳ぐ水鳥が写実的に表現されています。毎年晩秋～冬にかけて、古墳を囲む西池や北池にはマガモ・トモエガモ・オシドリなどが見られます。東に東大塚（現羽曳野市南恵我之荘）の集落や、遠方の信貴山系も望まれます。

都久路は明治三十三年（一九〇〇）、現大阪市中央区船場で、呉服商の家に生まれました。大正六年（一九一七）、画家を志して京都の著名な写生派画家であった猪飼嘯谷の内弟子となりました。のち、大正十年（一九二一）、矢野橋村が大阪阿倍野に開いた大阪美術学校の設立と同時に、同校に入学しました。都久路は、江戸時代の中国（明・清代）でおこった南画の影響を受け、やわらかな描線を用いた優美な山水の写生画を学んだのです。在学中、画家として、またエッセイストとしても人気を博した融紅鸞とも交友し、昭和三年（一九二八）に卒業しました。

昭和六年（一九三一）、都久路は大阪美術学校の後輩であった吉田桐花（西岡千代子）と結婚し、のち、大阪市夕陽丘から当時の中河内郡松原町上田（現上田七丁目）に転居してきました。柴籬神社の西方、河内松原駅から南の新堂・岡方面に延びる中高野街道沿いすぐ西側の地でした。明治時代、上田村などの戸長（今の村長）を勤めていた西田源治家の家族が住んだ離れ屋敷に移り住んだのです。都久路宅は、すでに取り壊されていますが、旧宅の門や土塀は、今も当時のままに残されています。

都久路が三十二歳となった昭和七年（一九三二）以後、権威ある美術展覧会である文展や帝展（のちの日展）に入選し、画家としての地位を築いていきました。昭和十三年（一九三八）には、日本南画院の結成に参加し、創作活動を広めていったのです。

昭和初期の都久路の作品について、長女の西岡盈子は、父の思い出として、「生涯淡々と自然を見つめ、若い時代には自然の中で働く農民や漁師の姿を好んで写し…」と語っています（西岡千代子・西岡盈子『西岡都久路 作品集』昭和六十三年五月）。作品集には「帰港」「対島風景」「薩摩堀」「庭さき」「秋の日」などが収められ、海や土のにおい、野の香りを感じさせます。

戦後、都久路は大和・河内の風景や身近な草花をこよなく愛で、昭和四十年代後半以降、大阪や河内の文化を高める活動に郷土愛ともいうべき情熱を傾けていきました。昭和五十年代、大阪府が創設した大阪府美術協会の常任委員として、多くの人々を指導しました。大塚山古墳を、松原を代表する誇るべき風景として、画題としたのもこの頃です。文化財の古墳でありながら、木々や水鳥、遠景を詩情豊かな優雅さで描き、地域に想いをはせる深い愛情が感じられます。

一方、都久路は戦後直後から三十年近くにわたり、大阪市内や藤井寺の私立女子高校の美術教師にもなり、若い生徒たちを指導する教育者でもありました。

都久路は、昭和六十二年（一九八七）、八十七歳の生涯を第二のふるさと松原で終えました。私は、物静かながら、古武士然とした都久路と幾度となくお話をさせていただきました。松原市をはじめ、ゆかりの人々に多くの作品が蔵されています。

昨秋、ご遺族から本市に都久路の作品についての問い合わせがありました。私も、若干その取り次ぎをしたことから、改めて都久路の画業に触れました。昭和初期から、半世紀にわたって松原に居住した南画の大家、都久路を郷土の誇りうる画人として、いつまでも心の中にとどめておきたいものです。